近松門左衛門の鬼

――浄瑠璃の場合――

鎌倉惠子

はじめに
一　鬼の述懐
(a)　『酒呑童子枕言葉』
(b)　『日本西王母』と『用明天王職人鑑』
二　鬼の生れ変り
おわりに

はじめに

浄瑠璃には地獄の鬼を始め、特定の場所を住処とする鬼、生霊・死霊が鬼あるいは鬼女の形を取るものなど、性格の異なった鬼が登場する。近松の作品にも先行作から受け継いだこれらの鬼が登場する。本稿ではその中から先行作の鬼とは異なった面を持つ例を取り上げ、作者が鬼を通して何を表現したかったのか、探ってみたい。ただし、いわゆる古浄瑠璃類の調査が不備なため、近松独自のものと捉えてもそれが誤解である可能性もあることをお断りしておく。

また蛇については「鬼が住むか蛇が住むか」のように鬼と同列に使われること、能面では蛇の面が鬼面に属していること、近松作の『日本振袖始』に「鬼共蛇共見へわかず」の詞章があることや、さらに同作で悪蛇を悪鬼と言い替えていること等から、変化の蛇の場合は鬼として扱うことにした。

一　鬼の述懐

(a)『酒呑童子枕言葉』

『酒呑童子枕言葉』（宝永七＝一七一〇年五月五日以前）の第一には渡部綱が、羅生門で切り取った鬼の腕を取り返されたことを悔やむと、平井保昌が次のように言う場面がある。

鬼のかひなを切りたるが何程の高名ぞ。それを手柄と思ふ故又うばゝれしも恥辱と思ふか。ェ、浅ましや可愛やな（中略）変化鬼神を鎮むるは禰宜山伏行法の。出家の加持の数珠さきにて祈り伏するも珍らしからす。弓矢取身の高名は。鬼より恐い朝敵大敵を滅ぼし。生捕分取り誉れを子孫に残すこそ手柄とは云べけれ。

綱の羅生門での活躍は、中世以来知られたことであり、本作に先行する浄瑠璃にもよく取り上げられていた。しかしこの保昌の発言はいかにも近世人らしいと言えよう。この頃には大半の観客にとって、鬼も鬼退治も昔の物語の中の出来事である。それにも関わらず酒呑童子退治の作品は享保頃までたびたび上演されている。これは内容的な面白さだけではなく、源家の統領である頼光の活躍による天下太平という結末が、源氏の末裔とされる徳川氏による幕藩体制にとって都合がよいという、江戸時代初期以来の精神の流れを受け継いでいたからであろう。このような中で保昌に鬼より恐いのは朝敵すなわち人間であり、武士の本分は鬼退治ではないと言わせているのは、『平家女護島』（享保四＝一七一九年）の千鳥の台詞、「鬼界が島に鬼はなく鬼は都に有けるぞや」と同様な作者の皮肉とも受け取れる。

酒呑童子について能『大江山』では、代々の住処としていた比叡山を伝教大師に追い出された、『御伽草子』では、越後の山寺育ちの稚児が妬みから人を殺し比叡山に入り、そこを伝教大師に追い出されたとしている。そして酒を飲んで頼光一行に心を許した童子がおのれの過去を語るという形式は共通である。浄瑠璃では童子の出身を越後とした『御伽草子』からの引用が多い。近松も童子が過去を語る点や、童子の前身は越後の山寺にいた人間である点は先行の浄瑠璃を踏襲している。ただし鬼となった理由は

余りに母の寵愛深く十歳迄懐に抱かれ。明暮乳房を飲みたる故乳房の味忘れかね。五穀は口に苦き故夜に入ば山寺の。師匠同宿児法師のねやに忍んで乳房を吸ふ。初の程は笑はれしが（中略）終にそこを追出され比叡山に上りしに。三千坊の乳房を夜な〳〵吸ふて廻りしに。終に生血を吸出し乳味は忘れて血潮を好む。鬼児也と伝教大師我立杣を追出され。（中略）それよりしゝむら喰出て心も自然とたけ〴〵敷。人の屍に食ひ付ば口も裂けて牙生ず。（中略）多くの人を取食らひ。いつの間にかは我心誠の鬼と成し故。姿は天然鬼形と成

と語られ、母の溺愛が童子を鬼にしてしまったとしている。故郷で殺人を犯したという先行作の童子とは異なった人となりである。親の子を思う情がかえって子供の性格を破綻させその身を破滅させてしまう例は、『女殺油地獄』（享保

六＝一七二一年）にも見られ、両作のような設定は当時の人にも納得のいくものであったろう。人間がその心から鬼になるという不条理も、伝説の世界であるからこそ観客に抵抗なく受け入れられたはずである。

人の心の中の鬼を、作者は初期の作品『津戸三郎』（元禄二＝一六八九年）にも登場させている。この作品の第五で三郎が切腹すると胎内から悪性と善性の二つの玉が飛び出す。悪性の玉からは悪鬼が火車を引いて現れ、

抑我津戸三郎が心魄に宿つて年久し。（中略）汝も我我も又汝たり此車に乗じて来れ。魔界に引導して仏法を破り三界皆我道に引入れん。来たれ〳〵と呼ばはる

するともう一つの玉から

妙なる声有て。汝何者ぞ我は是津戸三郎が心に住せし仏性。（中略）極楽へ引接せん。

と語りかけ、悪鬼と玉は戦うが、

玉の中より南無阿弥陀。南無阿弥陀仏と十念を下し給ふと見えける時。津戸は極楽往生す玉は開けて弥陀如来。悪鬼は二尊車は蓮華。炎は涼しき雲中に諸菩薩諸仏来迎有。

となる。この場は仏教の霊験を扱う浄瑠璃の切りに多く見られるからくりの見せ場であることは勿論である。しかしここで法然が

以前の玉（筆者注　悪性）も汝が心あの玉も汝が心。（中略）地獄も心極楽も心。

と三郎に語りかけ、心を具体的な形で現しそこに鬼が登場した点に注目したい。

ところでさきに挙げた酒呑童子の身の上話の前には、頼光達が童子から出された酒肴、即ち人血・人肉を喜んで受ける場がある。童子がこれを不審がると山伏に変装している頼光は

我らが行の習ひ。慈悲とて給はる物なれば心に染まねど辞退せず。ことにか様の酒肴本来空の人間。空に二つの味ひなし

と答える。この場面は先行作の踏襲で先行作では頼光の言葉に、童子は心を解いたり呆れたりする。しかし近松作では

童子興を冷ましいや其悟は無の見也。人の血を吸しゝむらを服すること。仏の教に有や否や。只今止まり給はずは次第〳〵に増長し。童子がごとく鬼神と成。悔み嘆き給ふ共其時はかひあらじ。我らが人を服すること能ことゝ覚すかや。面白からんと覚すかや。今は止めても止め難き鬼畜の身こそ悲しけれ。

と記され、さきに挙げた身の上話が始まる。

先行作では頼光達の行為は目的のための勇敢なものとして描かれるが、本作では醒めた眼で、さらに言えば童子の言葉を借りて皮肉に語られているように思われる。その後の「止めても止め難き」ことは観客にとっても日常生活で思い当たることがあり、共感できる部分であったと想像される。

また先行作の童子は頼光達が討伐に来ることのみを恐れているが、本作では

よしきやつばらが来る共此世の敵は防ぐべし。悪業つもりし未来の敵何をもつて防ぐべき。浅ましの鬼畜の身。去によつてかた〴〵も真似にも悪に慣れ給ふなと。御意見は申ぞや（中略）本国に帰り給はゞ我取殺せし幾千人の。後世弔ふでたべ客僧と。しほ〳〵として語りしは恐ろしくも又あはれ也。

と記されている。さきに挙げた鬼となるきっかけも含めこの童子は、きわめて人間的に描かれ、伝説上の鬼でありながら現実味を帯びている。

本作以外に鬼になったものの「あはれ」な述懐はない。ただし鬼に変身する者が述べた言葉には、単なる悪人の言い訳として片付けられない面がある。次にその例を見ていこう。

(b)『日本西王母』と『用明天王職人鑑』

『日本西王母』（元禄末頃）では第一、第三に登場する薄雲御前が、第五で実は欲天の曠野鬼であると言って本性を現

す。薄雲は醜い大女であるが、勅命により豊舟と縁を結ぶことになる。ところが豊舟は、以前から薄雲の妹二位の君と契りを交わしており、薄雲の醜さに驚き逃げだそうとする。嫉妬に狂った薄雲は「人共鬼女共変化共いはんかたなき乱れ髪」で妹を追い回し、取り違えて遊女を傷つけさらに妹も殺す。この行為は薄雲が実は鬼であることの伏線というよりも、「すさまじかりける嫉妬」を見せる場として設定されたと考える方が妥当であろう。豊舟と妹の仲を知った薄雲は、

はつたとにらむ眼より涙を。はら〳〵とながし（中略）親の因果か身のむくひかかゝる姿に生付。（中略）つね〴〵我が思ひしは。たとへ殿御をもちたり共此顔にて枕をかはさんと云は面伏せ。みめよき手かけをゝきて参らせわらはゝ夫婦の名計にて。くらさんとは思ひしかど千人にもすぐれたる。器量よしと聞しより月をかぞへ日をかぞへ。今宵をこそ待つるに閨へも入らず捨られて。（中略）恨めしきは妹ながら二ゐの姫。さほど子の有中ならば姉にかくとは知らせぬぞや。世間はわらはがおつとゝ名付閨はおことに添はせんもの。時には二人の思ひも晴れわらはも恥をかくまじきに。ェ、思へばつらき人々やな。

と恨む。本作を初めて見た観客は、この場ではまだ薄雲の正体を知らない。彼女の「丈七尺ゆたかにて。色の黒きに厚化粧まかぶら高く鼻ひらき。髪さへ赤く（中略）とんともたれし其重さたゞ盤。石のごとく也」という様子に笑いを誘われた観客も、さきに挙げた薄雲の言葉すべてを嘘偽りと思って聞いてはいないであろう。この後で彼女について「しうねきかんばせ」と描写してあるが、縁遠い生まれ付きの哀れな女の繰り言ではあっても、一理あると感じたのではないだろうか。第五の切りで明かされる薄雲の正体と関連付けず、ここはあくまで人間としての彼女の言葉と受け取ってよいだろう。

次に人間が蛇体に変身する『用明天王職人鑑』（宝永二＝一七〇五年十一月か）を見たい。この作品第三に、夫に捨てられた女が釣鐘を落し蛇体となる、能『道成寺』の趣向が見られる。彼女の夫諸岩は、勅勘の身を妻が遊女となって

援助したにも関わらず、その父が敵側の人物と知ると自害するという偽りの文を送り、その後別の女と結ばれる。鐘供養の場で諸岩達と巡り会った妻は遊女となって苦労したことや自害するという文を見てから「涙にしぼり身もかれて。里の住ゐを追出され」たことを訴えるが、諸岩は世間や現在の妻の手前、あくまでも冷酷で食い下がる彼女を「したゝかに取てなげ。腰もおれよと踏み付」て、離別を言い渡す。その部分は

去る。ム、なんと我をさる。ヲ、さる。さる。さるふ。去程に〳〵尾上のかねの。月おち鳥ないて（中略）人々眠ればよき隙ぞと。立舞ふ様にて狙ひよつて撞かんとせしが。思へば鐘さへうらめしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見へし。引被きてぞ。失せにける。

と『道成寺』の趣向に移行してゆく。『道成寺』は先行の浄瑠璃・歌舞伎にもよく使われているポピュラーな作品であるが、それをどのように自分の作品に組み込むかが、作者の腕の見せどころである。あくまでも男として建前の世界に生きようとする諸岩と、女としての本音を貫こうとする妻の相違が浮き彫りにされるが、妻の怒りはもっともであって、『道成寺』のシテより本作の妻に観客は同調するのではないだろうか。

二　鬼の生れ変り

『日本西王母』第五では「晴天曇つて稲光雷電大地を裂くごとく。黒雲うずまく其ひまに悪鬼のかたち現れ」、自分は「人間の恵命を断つ欲天の曠野鬼」が薄雲御前と生をあらためたと名乗る。すると「二天あらはれ出薄雲をかいつかんで雲上。はるかに」上り引き裂きめでたしめでたしと本作は終る。この部分は先行の浄瑠璃にもよく見られるからくりを使った切りの見せ場であることは言うまでもない。またある人物が中国やインド等の歴史上・伝説上の反逆者の生れ変りであったとするものも、歌舞伎を含めた先行作に散見される。反逆者は眼をむき時には角を持った異様な形相を

しており、鬼にたとえられたり鬼と記されることが多い。外見にふさわしい超人的な力を持ち、彼の行為や彼を征服する英雄の活躍を見せ場としている。近松の作品では他に『大職冠』（正徳元＝一七一一年十月前後）の入鹿が欲天の摩醯首羅・阿闍世王・紂王の、『釈迦如来誕生会』（正徳四＝一七一四年秋以前）の提婆が欲界の魔王の、『日本振袖始』（享保三＝一七一八年）の岩長姫が悪蛇、『浦島年代記』（享保七＝一七二二年）の眉輪王が外道眉輪の翁の、生れ変りという設定である。このうち『大職冠』の入鹿や『釈迦如来誕生会』の提婆は鬼として表現はされていない。

なお『関八州繋馬』（享保九＝一七二四年）の小蝶は「我そのかみ。南閻浮州にわだかまり。葛城山に年をふる土蜘の精霊也」と名乗り生れ変りとは記されていないが、精霊が小蝶に憑いたのではなく精霊＝小蝶であること、本性を現した後、英雄と戦い破れるまでが、この作以前に登場する生れ変りのものと似ていることから、本稿では一緒に扱うことにする。

『日本振袖始』の岩長姫は『日本西王母』の薄雲御前と同様、醜い生まれつきで妹木花開耶姫と帝の仲を妬む。彼女の性格の悪さは他の人物の口から強調され、第一で八咫の鏡に「悪鬼」として映し出され「正体見られし腹立や」とその場にいた局を引き裂く。その後さらに「彼悪鬼と申は。天に有ては雲の八街に住。地に有ては八方八隅に変満し八色八面の悪蛇」と表現され、観客には早くからその正体がいわゆる八岐大蛇とわかるのである。

岩長姫の正体が第一で明かされる『日本振袖始』と、正体が第五の切りまで明かされない『日本西王母』では、設定は一見似ているようであるが、二人の性格、作品の内容は異なったものになる。すなわち岩長姫は正体が判明すると、盗めば「芦原国の武勇の破滅」となる宝剣を狙うために姫と生まれたと自ら語り、宝剣を奪い去る。そして剣をだまし取られた素戔嗚尊が奪い返す旅に連れて物語が展開することになるのである。『日本西王母』の薄雲は第五で正体や目的を明かしても目的達成のための行為がなく、その場で引き裂かれてしまう。彼女の正体は物語の展開と直接、関わってはいないのである。

『日本振袖始』第五には素戔嗚尊の大蛇退治の場面がある。両者が戦う前に、仕掛けられた毒酒に酔った岩長姫が次第に本性を現す節事「八雲猩々」がある。ここには

我宝剣に心をかけ。岩長姫とは生まれしか。蛇道の縁は切れやらず。悪女と生れ人に笑はれにくまれし。美女は悪女の炎の種（中略）見めよき女を取つくさんと。（中略）人を取事多年也嬉しや今宵ぞ巡りくる〳〵姿は女。心はいかに。鬼共蛇共見へわかず見る目もくらき。心の闇。

とごく短いが、悪女と生まれた悲しみや蛇としての苦しみが描かれていて、人間的な面を僅かながらのぞかせている。

ところでこの作品には、もう一つ別の悪鬼が登場する。それが三熊野大人で退治に来た素戔嗚尊に降参して、「我国に仇をなさじと誓ひの手形」を押す。三熊野大人は

天地の間の悪鬼悪蛇。同類同性とは申せ共つかさどる役々に変はり有。我らは厄神（中略）人間に四百四病をあたへ。業の尽きる命は取。非業の者は殺し申さず

と言うが彼の登場する場面は滑稽味もあって岩長姫より大人の方が軟弱である。「同類」とはいえ生粋の鬼である三熊野大人が姫の形をしている大蛇より弱いのは、彼が厄神であるのに対して、大蛇は宝剣を狙う、いわば日本国転覆を図る性格を持っているからであろう。

『浦島年代記』の眉輪王は安康天皇の子として女御の胎内に宿るが、袋子であるので天皇には知らされず、葛城山に捨てられる。牡鹿の角に袋を破られ赤い鬼子として生まれた眉輪王はわが子を尋ねて来た天皇を踏みつけ、前生で天皇に恋人を奪われた上に殺された恨みを述べ、「汝を始雄略天王。日本の人民つかみ殺し神道の根をたやし（中略）三国共に魔界となさん手始。汝が首第六天の生贄と。ゑいやつと捻切」ってしまう。恋人の父は眉輪から娘を所望された時、承諾しながらわが身の出世を考え娘を天皇へ差し出した野心家で、この件を恨んだ眉輪は「外道を行ひ」殺されたのである。眉輪が外道になるいきさつには同情すべき点もあるが、鬼子に生まれ変わってからの彼には先の岩長姫ほど

の苦しみもなく、人間的な面はないと言ってよかろう。

『関八州繋馬』の小蝶は、将門の娘で父の仇討のため宮仕えをするが、敵の一人である頼信を恋し、恋敵の毒殺を図って殺される。兄太郎良門から頼信殺害の手引を求められた彼女は、「巧みの筋もあだ花の色に引るゝ小蝶が心。頼信君を今更に討タすもつらし引ㄱれもせす。返事に迷ふ恋慕の闇」と人間的に描写されている。彼女は殺された後、兄の危機を救い恋敵にたたるので人々は、彼女の魂を送り出そうと聖霊の送り火を焚く。すると皮肉にも炎の中から彼女の姿が現れ、「葛城山に年をふる土蜘の精霊也。大日本を押領し魔界になさんと。将軍太郎が心に加被しかひも情の道にうばゝれ」と名乗る。この言葉の前半は能『土蜘』の流用であるが「大日本」以下は、能にない言葉で先行作よりもおのれの意図を強く表現している。やがて本性を現した土蜘は葛城山で平井保昌・坂田公時等と戦うが、「息に火焔を吐。（中略）子蜘共。（中略）群がり集ては区々単々と別れ散り。這うかと見ればすつくと立チ。蜘かと見れば小鬼の形チ」と記され、からくりを使った見せ場が設定されている。(1)

鬼やそれに類するものの生れ変りが登場する作品は『日本西王母』を除き、『大職冠』の入鹿を初めとして、その活躍に大小はあるものの第一から第四の間に正体が明らかになり、天下を奪う、この世を魔界にする等のための行為を行うが、目的を成就せずに滅びるのである。

滅びるきっかけは、酒や恋という人間的な弱みによるものもあるが、弱みを持たない眉輪王も結局、雄略天王が放った神力擁護の矢に当り退治される。

近松作品に鬼は貞享頃から登場する。そして元禄末頃から鬼の生れ変りという設定がなされ、やがてこの世を覆そうとして活躍する例がみられるようになる。

地獄の鬼や、嫉妬の情から生じ仏法の力で成仏する鬼では、もはや珍しくないこの時期、滅びることは決まっているが、一時強さを印象付けるものの出現を工夫してのことかもしれない。さきに述べたように正徳四年以降は、この世を

覆そうともくろむ鬼が多くなる。

この世を覆す反逆者は人間でもすむはずで、近松は事実、正徳頃からいわゆる謀反人劇を多く手掛け、中には悪の魅力を備えた人物も登場する。しかし人間の謀反人だけでは、不足だったのであろうか。近松は生れ変りとして出現したものの反逆も描くのである。彼の作品は宝永頃から内容が暗くなり、人間の力の限界を描く傾向が強くなる。そのような中で彼は人間以上の力を持つものとして、新たな鬼を創造しようとしたのかもしれない。

鬼類の生れ変りが活躍する浄瑠璃に、金平浄瑠璃がある。但し金平浄瑠璃の鬼を含む妖怪や魔王が謀反を行う時は、二川清が指摘したように「人間の普遍的な敵であり、日本国を魔界に化そうとする意図をもつものとして絶対悪となる」のである。[2] そして近松の鬼はそれぞれ鬼になる理由をもち、絶対悪とは言い切れず、それぞれ弱み、苦しみを持つ場合が多い。

おわりに

近松は中世から伝えられている鬼の中から、身の上を語る酒呑童子を選び、新たな身の上話を作り、鬼への共感を示した。しかし以後、酒呑童子ほどに人間的な鬼は描いてはいない。このことは他の先行作には、魅力ある鬼に作り上げられる候補がなかったと言えるのかもしれない。そこで近松はより強いものとして鬼の生れ変りを登場させる。彼が鬼を、より人間的にはせず、強いものにしたのは、からくりの見せ場を作るためでもあろう。次第に抑圧的になる時代に、人間にはできない悪――復讐に端を発することが多い――をなし、からくりを使ったスペクタクルで見せる、これが近松晩年の鬼の役割であったと言えよう。『津戸三郎』で心の鬼と仏性を具体的に登場させた近松は、晩年のいわゆる世話物『女殺油地獄』で殺人者を「身内は血潮の赤面赤鬼。邪慳の角を振り立て。」と描写しながらも一方彼を「心

てお念仏南無阿弥陀」と唱え「心もおくれ。膝節がた〳〵」する人間と描いている。「鬼は都に有」と世間を見ながらも、近松は人間の善悪両面を描こうとしたのであろう。鬼の生れ変りに、わずかではあっても弱みや悩みを持たせたのは、近松が絶対的な悪を描ききれない作者であったということかもしれない。

鬼以外の登場人物についても検討を重ね、また近世以前の芸能、例えば能等の影響も視野に入れながら、近松の人間像についての考察を進めてゆきたい。

注

（1）本作の絵尽でこの場面の土蜘の顔は角のある鬼の顔に描かれ、説明文には「かづらき山のつちぐも　火をふく大がらくり大でき」と記されている。

（2）「金平浄瑠璃における妖怪について」（『都大論究』二六号　一九八九年三月）